

高大連携仁淀ブループロジェクトにおける高校生の実感調査

1200452 島田美帆

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. はじめに

地域の活性化に、地域に存在する資源をそのまま活用しようという動きは、様々な形で活発になってきている。そんな中、大学や高校など、学校を地域の資源として活用することで、地域に貢献する人材育成を促進する取り組みもなされている。高校と大学の連携は、国内で広く取り組まれて久しい。文部科学省は「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」において、以下のように述べている（文科省HPから引用）。「高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携の位置付け」として、「中高一貫教育や現行学習指導要領の実施等により高等学校の多様化と選択の幅の拡大は更に進展している」ことから「特定の分野について高い能力と強い意欲を持ち、大学レベルの教育研究に触れる機会を希望する生徒の増加が予想され」ている。これらの「生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指す」ために「高等学校・大学の双方が、後期中等教育機関・高等教育機関としてそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学との接続を柔軟に捉え、生徒一人一人の能力を伸ばすための、高等学校・大学双方が連携した教育の在り方」を高大連携といい、これを目的としている実践活動であると文部科学省は示している。公立大学法人である本学においても、こうした活動は日常的に考えられ、高校側からも大学側からもニーズがある。本学では、地域教育センターや地域連携機構、あるいは各学群が関与しながら高大連携に取り組んでいる。

2. 概要

今回対象とする高大連携は、高知県立伊野商業高等学校のキャリアビジネス科 ICT コースが取り組む課題研究という授業に属するプロジェクトである。

高知県立伊野商業高等学校のある、いの町には、四国三大河川の仁淀川を有する豊かな自然があり、また、自然豊かないの町だからこそ育まれた製紙産業が今も町を支えている。しかし、高知市に隣接していることで、利便性の良さから働き口等を町外に求めることが多く、町外への支出が目立つ。また、日本全国で問題となる少子

高齢化の波を受けた人口減少も深刻である。この高大連携は、以上のような課題から、自治体や地元商店街、学校の関係者が危機感を持ち、2015年に大学の方に高大連携の声がかかった。そして、この高大連携は、いの町の仁淀川の美しい青の呼称「仁淀ブルー」をとって、「仁淀ブループロジェクト」という名称がつけられ、2016年度から活動が始動した。

仁淀ブループロジェクトの構想当初、高校生と大学生の連携による「地域課題解決能力の醸成と次世代を担う人材の育成」を目的とし、「高校生自身が、知る、考える、行動することを通じ、実践力とチャレンジ精神、コミュニケーション能力を養う」ことが目標として定められた。また、研究方法の手順として、2年次に①いの町の現状把握と課題解決、②発信するコンテンツの焦点化、3年次に③発信方法の検討と実際の発信を行うという概ねの枠組みが設けられた。そして、2016年～2017年は1代目学生リーダーが、大学生による講義も交えながら、実践的なフィールドワークや外部講師による講義等を含む活動を進め、筆者が2代目学生リーダーとなつてからの2018年度も同様に活動を進めた。2019年度においては、活動開始から3年が過ぎ、大幅な改善が行われ、外部講師による専門的で技術的な講義がより多く取り入れられるようになった。そのように活動が変化し、自分自身も大学生メンターとして講義に入り高校生と接する中で、この高大連携が本当に高校生の能力を活かすものになっているのかという疑問が生じ、本研究をスタートさせた。

3. 目的

本研究においては、高知県立伊野商業高等学校との高大連携の取り組みにおいて、高校生自身が「実践力とチャレンジ精神、コミュニケーション能力を養う」という目標をどの程度達成しているのか、また、「生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指す」という高大連携の目的が果たされているのか、調査を行い、活動の課題・現状を明らかにして今後の活動の展望を述べる。

4. 研究方法

2018年度と2019年度に高大連携に参加したICTコースの生徒を対象に、高校生自身の能力（目標に記される「実践力」・「チャレン

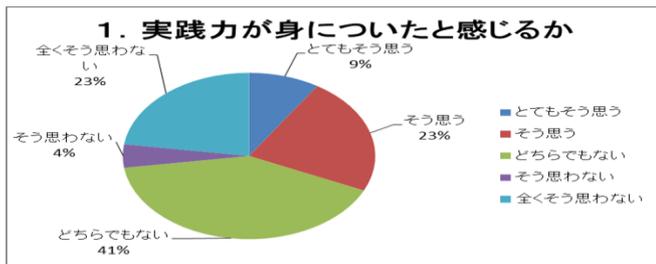
「コミュニケーション能力」他) 等に関するアンケート調査を行い、ヒアリング調査から活動の課題・現状を探る。これまでの大学生メンターとしての活動での気づきを踏まえて考察を行う。

5. 調査

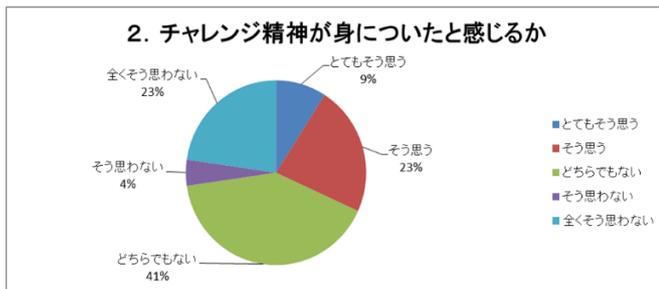
1) 2018 年度アンケート調査

2018年度は2年生22名、3年生20名にアンケート調査を行った。以下各学年の高校生自身の能力に関する実感の集計結果である。

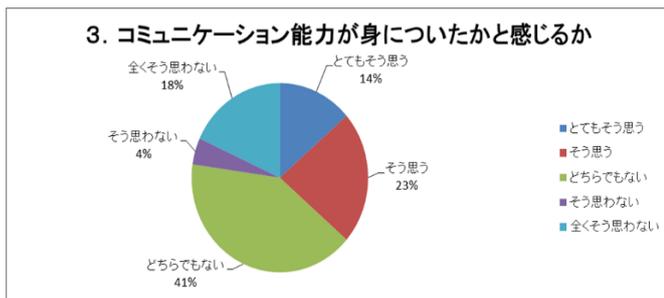
まずは、2年生のアンケート調査結果である。



(図1：筆者作成)



(図2：筆者作成)



(図3：筆者作成)

2年生は、「実践力」・「チャレンジ精神」・「コミュニケーション能力」が身についたと感じるかという質問に対して、どの能力に関しても41%「どちらでもない」という意見が一番多かった。唯一、コミュニケーション能力に関しては、14%が「とてもそう思う」と回答し、実践力・チャレンジ精神に比べ5%上昇し、「全くそう思わない」が減少した。

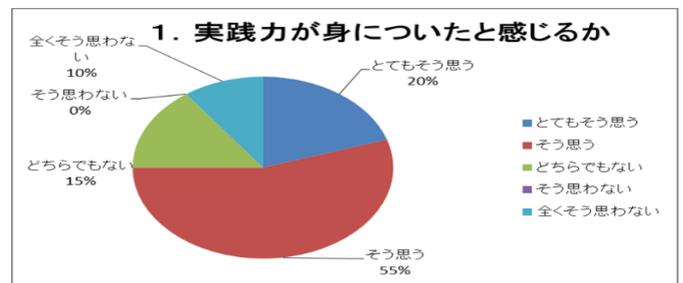
加えて、実践力・チャレンジ精神・コミュニケーション能力以外

に身についたと感じるスキルについて、自由記述で伺ったところ、「発表する力」・「考える力」・「探求心」の三つにほぼ集約できた。そのほかにクオリティーが高い、緊張感が味わえたという意見が挙がった。

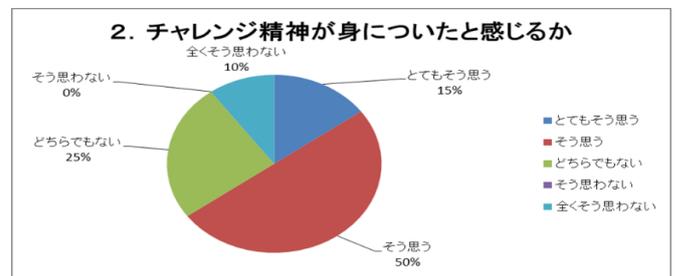
また、今後、この活動での経験や得たスキルは役立ちそうと感じるかという項目に対しては、22%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答しており、こちらもどちらもでないが45%と一番多かった。

このことから、2年生は高大連携において当初の目標があまり達成されていないことが分かった。また、活動の目的が理解されていない可能性が発覚し、説明の必要があると考えられた。

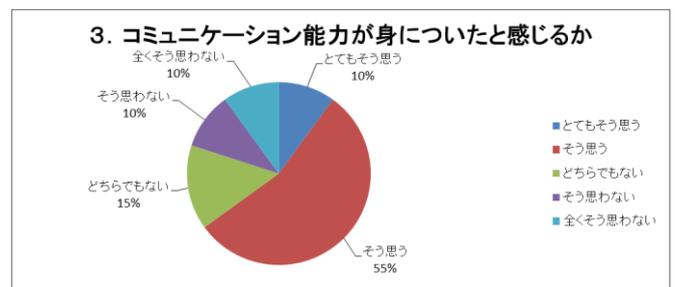
次に、3年生のアンケート調査結果である。



(図4：筆者作成)



(図5：筆者作成)



(図6：筆者作成)

3年生は、「実践力」において、75%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答し、学生自身が、実践力が身についたと実感していることが分かった。また、「チャレンジ精神」と「コミュニケーション能力」も65%の学生が「とてもそう思う」「そう思う」と回答

し、これらの能力が身についたと感じていた。

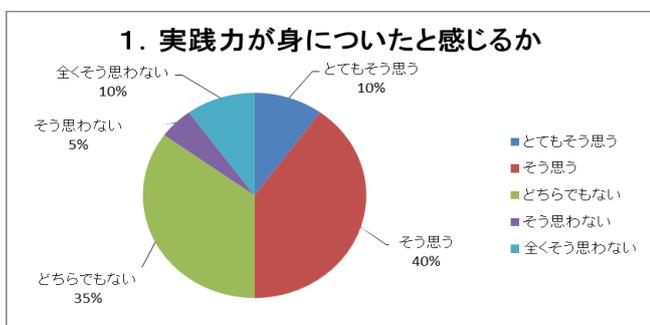
加えて、実践力・チャレンジ精神・コミュニケーション能力以外に身についたと感じるスキルについては、2年生同様、「発表する力」が挙がっており、その他に「熟考する力」・「客観的な視点」・「調べる力」・「不屈の精神」が挙がった。

また、これらの能力が役立ちそうかという問いに関しては80%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。

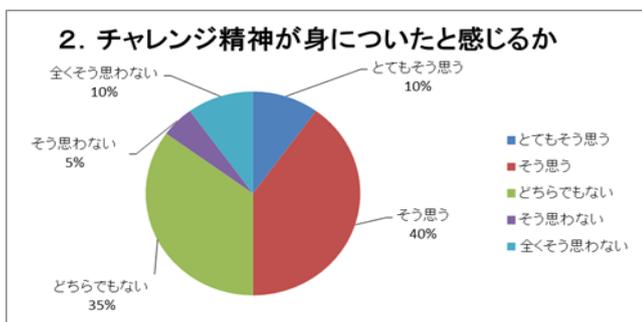
このことから3年生は、2年間の活動が本人も感じるような成長につながったのではないかと考えられた。

2) 2019年度アンケート調査

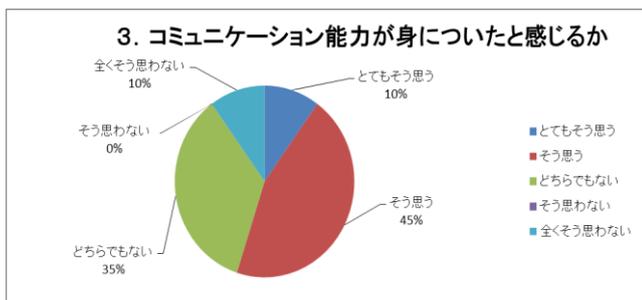
2019年度は3年生20名にアンケート調査を行った。尚、2019年度の3年生は2018年度にも同一のアンケート調査を行っている。



(図7：筆者作成)



(図8：筆者作成)



(図9：筆者作成)

「実践力」「チャレンジ精神」「コミュニケーション能力」のい

れ項目でも、「とてもそう思う」「そう思う」が半分の50%を超えた。特に、コミュニケーション能力は55%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答した。

加えて、実践力・チャレンジ精神・コミュニケーション能力以外に身についたと感じるスキルについては、「プレゼン力」や「大学生とのコミュニケーション」、「考える力」があげられた。

また、これらの能力が役立ちそうかという問いに関しては60%が「とてもそう思う」「そう思う」と回答している。

このことから、2018年度の3年生同様に、2年間の活動が、本人も感じられる成長につながったと考えられ、長期的な活動を通して、高校生自身に能力の向上を感じることができる、または、活動内容が効果的に修正されたと考えられる。

6. 考察

アンケート調査に加え、2018年度3年生2名に実施したヒアリング調査やこれまでの活動での気づきを踏まえて考察を行う。

1) 2018年度アンケート調査における学年間の差の考察

各学年の結果を比較すると「実践力」「チャレンジ精神」「コミュニケーション能力」いずれの結果でも2年生より3年生の結果の方がそれぞれの能力が身についたと感じているという結果が出た。

特に、2018年度の2年生に関しては、研究方法の手順①の町の現状把握と課題解決の段階において、各班、課題抽出に苦勞していたようだった。また、高大連携について、概要説明がないまま講義が始まったため、大学生メンターに対する不信感があった可能性も考えられる。このような問題から、2年生が実践力・チャレンジ精神・コミュニケーション能力を実感することがあまりできなかったため、数値が低くなったことが考えられる。

また、3年生のヒアリングからは、2年次に3年生の発表を聞いたことで自分たちが次を継いでやっていかなくてはならないという責任感が生まれたという声が聴かれた。

そのため、高大連携のスタートにおいて、学年間の顔合わせや情報共有を行い、大学生メンターを通さない高校生同士の交流も必要のように感じられた。

尚、2019年度は、高大連携の初回講義にて、大学生メンターが、仁淀ブループロジェクトの概要と2年間プロジェクトに取り組んだ学生のアンケート結果を踏まえた意見を2年生に説明を行い、活動の目的を理解してもらえるように努めた。

2) 2018年度から2年間の活動を終えた学生に関する考察

2019年度の3年生には、2018年度2年次に取った同様のアンケートを実施し、2年間の実感の差を明らかにした。

「実践力」「チャレンジ精神」「コミュニケーション能力」のいずれの項目においても、「とてもそう思う」「そう思う」が20%程度増加しており、反対に「全くそう思わない」という回答が10%程度減少した。

2019年度は活動内容が大きく変わり、3年生に関しては外部講師によるICTの専門的で技術的な講義へとシフトした。講義では、簡単にwebページを作成できるようなサービスを用いて、ネット上に記事を投稿するような形で、これまでの自分たちの取り組みを報告・発信した。この中では、自分たちのやってきたことを文章化する力や発信する力が必要とされたが、アンケートの自由記述の結果からは、プレゼンについての意見が上がり、これまでよりも伝えるという意識が強いように感じられた。アンケート結果は2年次よりも3年次の方が、数値的に上昇したが、その一方で、前3年生のようにイベント等の実地活動を行いたかったとの声も上がっており、数値に現れない問題も挙げられた。

7. 結論

1) 目標について

仁淀ブループロジェクトの構想当初の目標として高校生自身が「知る、考える、行動することを通じ、実践力とチャレンジ精神、コミュニケーション能力を養う」とされていたが、アンケート調査・ヒアリング調査からは、高校生自身が、活動を通して地域課題の探求していくなかで、ある程度は成長を実感していることが分かった。特に、いの町への提言など発表を通して、高校生に責任感が芽生えることも分かった。

2) 目的について

高大連携の「生徒の能力・意欲に応じた教育の実現を目指す」という目的については、毎年活動が少しずつ見直され、2019年度は外部講師に年間通して指導していただく講義を行う等大きな改善が施され、商業高校のICTコースといった専門性に特化した形に変化した。しかし、その過渡期となる学年となった2019年度の3年生においては、それぞれの意欲や能力を十分に発揮できない、活動内容になった可能性がある。高度な技術を身につけることも、商業高校の高校生には必要だが、これまでの活動のような実践的な内容

も含めて、活動を見直していく必要があるようだ。

また、大学生メンターの高大連携の関わり方も活動内容が見直される中で変化し、2019年度にはその位置づけがはっきりとできていない状況である。このようなことから、今一度、高大連携としての目的を見直し、より高校生の能力・意欲に応じた内容へと改善を施し、大学生メンターの活用していくことが必要であると考えられる。

3) 今後の展望について

商業高校の中でもICTを学ぶという条件下でも、生徒の興味関心は多種多様であり、高大連携という実践活動においては、個々人の能力や意欲、また、感性を活かすような教育体制が必要となる。個々人の感性を活かすためには、高校生自身に寄り添うコミュニケーションが重要と考えられ、年が近く脅威と感じられにくい大学生メンターは有効なのではないだろうか。しかし、前述したとおり、2019年度の活動において大学生メンターの位置づけが明確でないことに加え、その関わり方には不明確な要素(人数、意見のばらつき等)が多い。大学生メンターにできることやコミュニケーションという観点から、関わり方を今一度見直し、仁淀ブループロジェクトにおける大学生メンターの効果を高めることで高校生の能力を引き出す体制を見直していきたい。

また、2019年度の2年生においては、大学生メンターによる概要説明から始まり、外部講師が学生一人一人の興味関心を深めることから講義をスタートさせており、より高校生自身の思いが反映されたものになっていると感じている。今後も高校生の能力・意欲、感性に応じた内容にするため、2019年度の3年生の活動を振り返り、実践活動と専門性を高めた講義のバランスを見ていくことが重要であると考えられる。

今回の高大連携では、商業高校との取り組みということで、商業高校の学生が卒業後就職するケースが多いという特性も意識し、活動を通し自己理解を深め、強みを伸ばすことで、仁淀ブループロジェクトの活動の中で身につけた能力を活かし、実社会で自ら他者とコミュニケーションを図りチャレンジ精神をもって活動を実践していける人材を育成できるよう、今後の活動を進めていかななくてはならないのではないだろうか。

このように当初の目的・目標を踏まえ見直しながら、町や連携する高校、大学の特性を活かせるよう、変化していくことが高大連携には欠かせないと考える。

4) 課題について

今後、2019年度2年生に対して、新しい活動を取り組んだ学年として、差を明らかにするための追加アンケート調査を行いたい。また、仁淀ブループロジェクトに関わる大学生メンターは2018年度2019年度ともに伊野商業高等学校の卒業生のみだった。この偏りもなくし、今後、大学生メンターに対する意識調査も行っていくことが高大連携の活動を進めていくために必要と考えられる。

7. 参考文献

1. 文部科学省「3. 高等学校と大学との接続における一人一人の能力を伸ばすための連携（高大連携）の在り方について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/020-17/houkoku/06040408/001/004.htm

2. 尾上 夏菜「高大連携において高校生にもたらす ネガティブフィードバックの影響 ～仁淀ブループロジェクトを通して～」

2017年

3. 伊野商業高校より情報提供

【謝辞】

本研究にあたり、アンケート調査及びヒアリング調査にご協力いただいた高知県立伊野商業高等学校の学生、担当教諭の皆様、また、仁淀ブループロジェクトに携わってくださったすべての方々にお礼申し上げます。